

# 大学生の被受容感・被拒絶感に関する探索的検討

An exploratory study of perceived-acceptance and perceived-rejection among college students

弘前大学教育学研究科

近 江 則 子

弘前大学保健管理センター

田名場 美 雪

弘前大学教育学部附属教育実践総合センター

田名場 忍

「どのような他者」の「どのような対応」が被受容感・被拒絶感に結びつくのかを、自由記述データの内容分析により探索的に検討した。調査対象者は大学生206名（男性63名，女性143名）である。結果，父親・母親・親友からは被受容感を得ることが多く，被拒絶感を得ることは少なかった。対応については，被受容感は「一方的にサポートを得る」「一方的にサポートを与える」「双方向的なサポート感覚を得る」の3つに，被拒絶感は「マイナスが付加される」「プラスが付加されない」「双方向的な感覚が得られない」の3つに分類することが出来た。

---

## I 問題と目的

## II 方 法

## III 結果と考察

---

キーワード：被受容感，被拒絶感，自由記述，内容分析

## I 問題と目的

今日，多様な心理学的な問題を，対人関係や個人内の自己－他者体系の問題と理解する視点が重視されている。杉山（2002）<sup>1)</sup>は抑うつ傾向者の自己と他者のつながりの認識を捉える概念として，被受容感を「自分を支えてくれる他者の存在を感じ，自分は他者から一定の理解や暖かさ，承認をもって大切に扱われ，支えられているという認識と情緒」と定義し，被受容感の低さが抑うつ傾向者の特徴であると仮定した調査研究を行った。大学生を対象に，平岩（1996）<sup>2)</sup>の安心尺度の下位尺度である受容尺度を用いた因子分析を基に項目を選別して作った尺度を使用し，被受容感を測定した。結果，被受容感は，自己評価・気分の傾向・内的統制感を介して抑うつに関与することが明らかになった。また，杉山（2001）<sup>3)</sup>は被受容感の負の側面として被拒絶感を「自己が他者から蔑ろにされ，大切に扱われていないと感じること」と定義し，被受容感・被拒絶感と抑うつとの関連を検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果，被受容感と被拒絶感は異なる概念で異なる抑うつ過程をもつことも明らかにされた。しかし，被受容感・被拒絶感「誰がそれを与えるのか」によって異なると予想されるが，これまでの研究ではこの点について検討はなされていない。

本研究は，「どのような他者」の「どのような対応」が被受容感・被拒絶感に結びつくのかを把握することが，抑うつや自尊心を考える上で重要であると考え。被受容感と被拒絶感を前述の杉山（2001，2002）にならい「被受容感：自分を支えてくれる他者の存在を感じ，自分は他者から一定の理解や暖かさ，承認を持って大切に扱われ，支えられているという認識と情緒」「被拒絶感：自分が他者から蔑ろにされ，大切に扱われていないと感じる認識と情緒」と位置づける。どのような他者のどのような対応や理解が被受容感・被拒絶感に結びつくのかという点に着目し，大学生における被受容感・被拒絶感の領域を探索的に検討することを目的とする。

## Ⅱ 方 法

### 1 調 査

〔調査1〕 A学部2年次以上の学生105名（男性34名，女性71名）を対象に，記名式の質問紙調査を行った。質問内容は以下のとおりである。

- ・被受容感：大学入学以降，最も被受容感を感じた出来事について自由記述を求めた。またその被受容感を与えた他者については，表1に示す選択肢からひとつ選択することを求めた。なお，教示は「大学入学後，あなたが『他者から大切に扱われている・精神的に支えられている』と最も感じたのはどのような時でしたか。『誰から』『どのような対応をされた』時にそう感じましたか。それぞれ具体的にお答え下さい」である。

表1 選択肢リスト

---

父・母・姉・妹・兄・弟・祖父・祖母・同性の友人・異性の友人・同性の親しい友人・異性の親しい友人・同性の先輩・異性の先輩・同性の後輩・異性の後輩・恋人・その他

---

- ・被拒絶感：大学入学以降，最も被拒絶感を感じた出来事についての自由記述を求めた。またその被拒絶感を与えた他者については，表1の選択肢からひとつ選択することを求めた。なお，教示は「大学入学後，あなたが『他者からないがしろにされている・大切に扱われていない』と最も感じたのはどのような時でしたか。『誰から』『どのような対応をされた』時にそう感じましたか。それぞれ具体的にお答え下さい」である。

〔調査2〕 B学部1年次の学生101名（男性29名，女性72名）を対象に，記名式の質問紙調査を行った。大学2年生以上との違いをみるために，質問内容は調査1と同様に行った。

### 2 分析手続き

被受容感・被拒絶感を感じた出来事についての自由記述の分析は内容分析を行った。具体的な手順は以下の通りである。

分 析 単 位：対象者には「経験をひとつ記述すること」を求めたため，分析単位は1対象者1単位が原則となっている。しかし，実際の回答には複数の単位を含む記述も提出された（例：「つらい時に話を聞いてくれたりは勿論，夜にわざわざでてきてくれたりなど。」）。被受容感・被拒絶感のバリエーションについての情報は重要であると考えため，複数の単位を含む記述については，1対象者に対して複数単位のコーディングを行うこととした。

分類カテゴリー：調査1においては分類カテゴリーを設定せず，探索的にコーディングを行った。調査2では，調査1で得られた分類カテゴリーに従いコーディングを行い，分類カテゴリーそのものを補強した。

コーディング：コーディングは，主観による偏りを避けるため，共同研究者と共に行った。

## Ⅲ 結果と考察

### 1 被受容感

#### ①被受容感を与える他者について

調査1と調査2をあわせて検討する。被受容感を与える他者の割合を図1に示す。大学1年生・大学2年生以上の両方で母親と親友の割合が高い。母親と親友は，大学生に被受容感を与える人物となりや

すいようである。母親と親友との間に、被受容感を与えるような似た性質が存在する、あるいは母親に似た性質の人物に親密さを感じて親友になった等の推測が出来る。

大学1年生において、母親が39.4%と高い割合で選択されている点は特徴的である。これは、入学したての生活環境の変化によるストレスが関係していると考えられる。つまり入学したばかりで不安が多く、まだ学内には親しい友人がいない状態で、自分とのつながりが感じられる人物は身近な存在である家族、母親ではないだろうか。実際、新しい環境に対する戸惑いや友人関係の構築に関する悩みの相談を聞いてもらうことが被受容感につながるという回答も多くみられた（例：「入学したてで、疲れがたままって、くたびれていたときに、沢山心配してくれた」）。また、母親の側では一人暮らしを始めた子どもへの心配や不安が増え、働きかけが頻繁になると予想される。つまり、母親の働きかけの頻度と子どもの不安感の相乗効果が関係していることも考えられる。

一方、大学2年生以上で父親・母親・家族を合わせた割合は大学1年生と比較して少ない。この理由として、初めのうちは親からの働きかけが被受容感につながっているが慣れが生じ被受容感を感じなくなる事、親からの連絡が減ること、大学にも慣れて人間関係の中心が家族以外に移ること等が推測される。



図1 被受容感を与える他者（図中の値は人数を示す）

## ②被受容感を感じた出来事についての内容分析：大学2年生以上

調査1の内容分析の結果、「相談」「配慮」「道具的」「頼りにされる」「共感」「共にいる」「その他」の7つのカテゴリーに分類された（図2参照）。

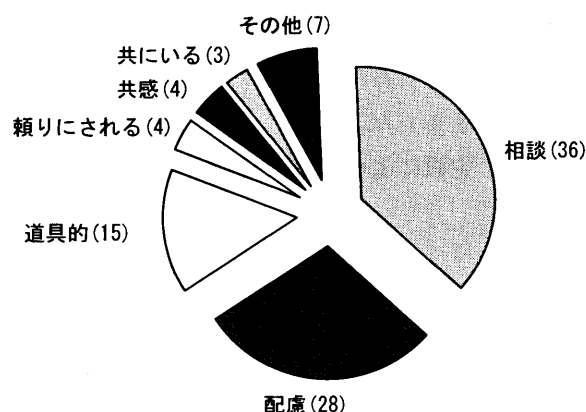


図2 大学2年生以上の被受容感のカテゴリー（図中の値は人数を示す）

「相談」が37.1%と最も多く、次いで「配慮」28.9%、「道具的」15.5%であった。さらに細分化すると、「相談」は「聞いてもらう」「アドバイスをもらう」「励ましてもらう」、「配慮」は「優しくしてもらう」「注目してもらう」「心配してもらう」「元気づけてもらう」、「道具的」は「看病してもらう」「物をもらう」「駆けつけて来てもらう」となる。上記3カテゴリーに共通しているのは、自分が悩んだり困ったりした時に力を貸してもらうことで自分が支えられている感覚を得ていることである。「道具的」では、「遠いのにな看病に来てくれた」など距離に言及したものが複数みられた。これは、支払ってもらったコストの高さが被受容感に結びついているということを示しており、より高いコストはより大きな被受容感に結びついていると考えられる。またこれら3つのカテゴリーは、他者に何かをしてもらうという点で共通であり、「一方的にサポートを得る」という大分類にまとめることとした。「その他」は、認めてもらうといった「支持」、約束を守ってくれたといった「信頼確立」であるが、これらも他者に何かをしてもらうという内容であるため、「一方的にサポートを得る」という大分類に入れた。「頼りにされる」は4.1%で、細分化すると「深刻な相談をされる」「自分が誰かの支えになっている」である。これは自分が他者に何かを与えることが被受容感につながっているので大分類は「一方的にサポートを与える」とした。他者に頼りにされることから自分を認めてもらっているという認識が得られ、その認識が被受容感につながったものと考えられる。

また、「共感」は4.1%、「共にいる」は3.1%であった。これらを細分化すると「共感」は「気持ちを共にする」「わかりあえたと感じる」で「共にいる」は「一緒にいること自体」である。「配慮」「相談」「頼りにされる」等が一方的なサポートであるのに対して、お互いに与えたりもらったりすることが重要視されていることから、「双方向的なサポート感覚を得る」という内容でまとめることができる。その人と「一緒にいてもいいのだ」という自分の居場所があることへの安心感や、通じ合っている、分かち合っているという一体感が被受容感をもたらしたと推測できる。

### ③被受容感を感じた出来事についての内容分析：大学1年生

調査1で得られたカテゴリーをもとに調査2の内容分析を行った（図3参照）。

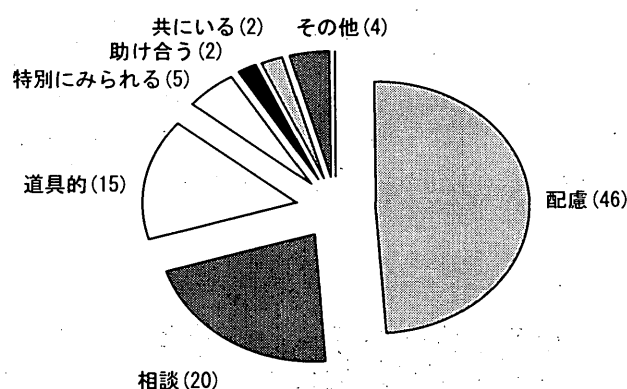


図3 大学1年生の被受容感のカテゴリー（図中の値は人数を示す）

その結果「特別にみられる」「助け合う」が新たなカテゴリーとして追加された。「特別にみられる」は細分化すると「頼りにされる」「尊敬される」である。調査1では「頼りにされる」でひとつのカテゴリーとしていたが、調査2で「尊敬される」という項目が新たにあげられ、どちらも相手に特別視されている内容であることから「特別にみられる」というカテゴリーでくくった。「助け合う」は双方向的な行為であるため新たに「助け合う」というカテゴリーを作成した。

大学1年生の調査では「配慮」が48.9%と圧倒的に多く、具体的な記述には母親が心配して電話をくれるという内容が多かった（例：「携帯に、元気でやっているか、わざわざ電話をくれた時」）。入学して実家を離れたことが関係しているようである。

表2 被受容感の内容

作用の方向		カテゴリー	例
一方的	サポートを得る 「～してもらう」	相談	聞いてもらう アドバイスをもらう 励ましてもらう
		配慮	優しくしてもらう 注目してもらう 心配してもらう 元気づけてくれる
		道具的	看病してもらう 物をもらう 駆けつけて来てもらう
		支持	認めてもらう「そのままのあなたでいいんだよ」
		叱ってくれる	注意してくれる 怒ってくれる
		信頼確立	約束を守ってくれた
	サポートを与える 「～してあげる」	特別にみられる	頼りにされる 尊敬される
双方向的		共感	気持ちを共にする わかりあえたと感じる
		共にいる	一緒にいること自体
		助け合う	協力しあう 助け合う

## 2 被拒絶感

### ①被拒絶感を与える他者について

被拒絶感を与える他者の割合は図4の通りである。大学1年生と大学2年生以上の両方で、友人が群をぬいてトップであり、父親と母親はそれぞれ低かった。また、親しい友人の選択される割合が低いのは、親密化過程において自分自身に被拒絶感を与える他者とは親友という段階にまで発展しないことが原因と考えられる。

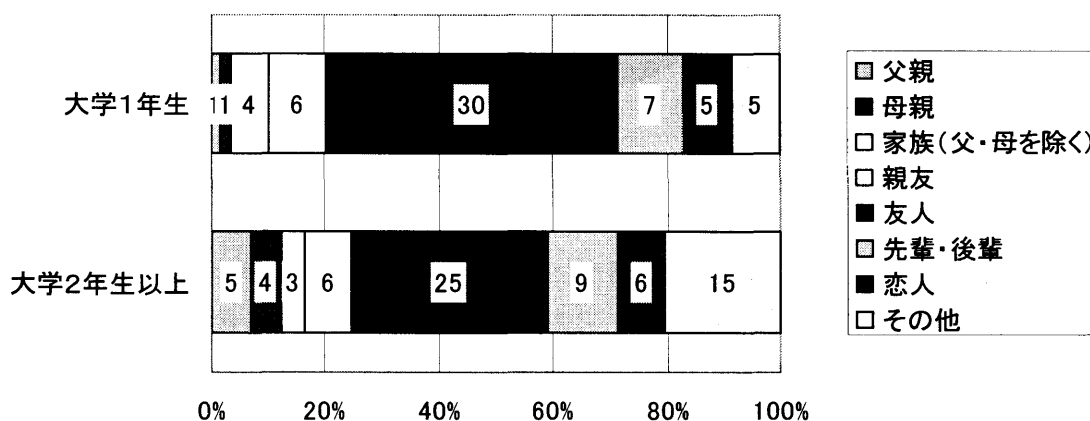


図4 被拒絶感を与える他者（図中の値は人数を示す）

②被拒絶感を感じた出来事についての内容分析：大学2年生以上

内容分析の結果、「粗末」「差別」「約束破り」「連絡無し」「返報無し」「悪口」「強要」「その他」の8つのカテゴリーに分類された（図5参照）。

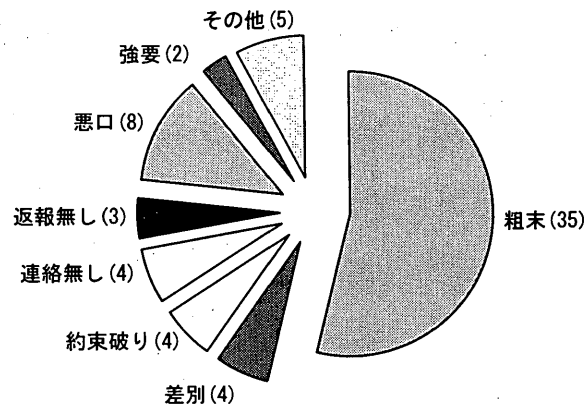


図5 大学2年生以上の被拒絶感のカテゴリー（図中の値は人数を示す）

「粗末」が53.8%と最も多く、次いで「悪口」12.3%、「連絡無し」6.2%、「差別」6.1%、「約束破り」6.1%、「返報無し」4.6%、「強要」3.1%、「その他」7.8%であった。それぞれを細分化すると、「粗末」は「対応に不足を感じる」「無視される」「理不尽な扱いを受ける」「誘われない」、「悪口」は「嫌なことを言われる」、「連絡無し」は「連絡がこない」、「差別」は「他者とは異なる扱いを受ける」、「約束破り」は「約束を守ってもらえない」、「返報無し」は「感謝されない」「協力してもらえない」、「強要」は「嫌なことをさせられる」である。また「その他」は理解が得られないといった「無理解」、注目してもらえないといった「非注目」、「自分はいなくてもいいのでは?」と感じる「所属感の無さ」に細分化した。その中でも「粗末」「連絡無し」「返報無し」「約束破り」「無理解」「非注目」の6つは、自分が望んでいる対応や当然あるべき対応が得られないことを表す内容でまとまっていると考え、「プラスが付加されない」という大分類にまとめた。

また、「悪口」「強要」「差別」は自分が望まない対応や嫌な対応をされるという内容に共通点があり、「マイナスが付加される」と解釈した。

「所属感の無さ」は、何をされたわけでもなく対応に不足を感じるわけではないのに、ふと自分の存在の必要性に自信がなくなることを表している。

③被拒絶感を感じた出来事についての内容分析：大学1年生

調査1でつくったカテゴリーをもとに内容分析を行った（図6参照）。

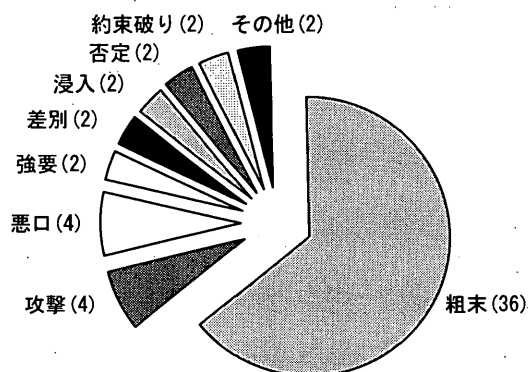


図6 大学1年生の被拒絶感のカテゴリー（図中の値は人数を示す）

その結果「攻撃」「侵入」「否定」が新しいカテゴリーとして追加でき、それぞれを細分化すると「攻撃」は「にらまれる」「ため息をつかれる」,「侵入」は「プライバシーの侵害」,「否定」は「人格を否定される」である。

大学1年生の調査では、メールに関する回答が多くみられた。「メールがつめたいとき」や「地元の友達からのメールの返信がおそい」など、返信が無いのみならず返信の遅さや返信内容までもが被拒絶感に影響を及ぼしている。特に地元の友人とのメールのやりとりは重要であると考えられる。新しい環境で友人関係の構築を試みている段階では、地元の友人とのつながりは自分の居場所を確認する大切な場であり、返信の遅さや内容の希薄さが居場所の崩壊感につながり、結果的に被拒絶感を感じると推測できる。

表3 被拒絶感の内容

作用の方向		カテゴリー	例
一方的	マイナスが付加される 「～される」	悪口	嫌なことを言われる
		強要	嫌なことをさせられる
		攻撃	にらまれる ため息をつかれる
		差別	他者とは異なる扱いを受ける
		侵入	プライバシーの侵害
		否定	人格を否定される
	プラスが付加されない 「～してもらえない」	粗末	対応に不足を感じる 無視 理不尽な扱いを受ける 誘われない
		無理解	理解が得られない
		非注目	注目してもらえない
		連絡無し	連絡がこない
		約束破り	約束を守ってもらえない
		返報無し	感謝されない 協力してもらえない
双方向的		所属感の無さ	自分はいなくてもいいのでは？と 感じる 取り残されたと感じる

### 3 まとめ

本研究では、「どのような他者」の「どのような対応」が被受容感・被拒絶感に結びつくのかを、自由記述データの内容分析により探索的に検討した。

まず、「どのような他者」が被受容感・被拒絶感を与えるとみなされているのか検討する。父親、母親、親しい友人といった重要な他者から被受容感を与えられることは多く、反対に、被拒絶感を与えら

れることは極めて少ないという全体的な傾向がある。また、学年による特徴がみられた。大学1年生は大学への移行という危機的な時期にある、つまり入学したてで新しい環境への不安や対人関係におけるストレスにさらされやすい。吉良（2001）<sup>4)</sup>によると、新しい環境に慣れていく途中では過去とのつながりを大事にする必要がある。本研究結果において、1年生では特に母親から被受容感を得ていることはこのような1年生の特徴を反映したものと言える。また、大学への移行は親からの心理的分離と生活上の自立の達成という発達課題遂行に必要な移行のひとつであるが、移行初期では親も子どもも心理的分離に不安を感じ、親の側では働きかけが増え子どもの側では親からの被受容感を感じやすい体制になっている可能性が推測される。また大学2年生以上では1年生と比較すると、母親の割合が減り親友や恋人が被受容感を得る存在として浮上してくる。これは、サークルなどさまざまな同輩グループとの接触が青年の価値観、世界観、生活様式の形式に影響を及ぼす新しい刺激源となり相対的に親の影響力を弱めるかもしれないという南・山口（1991）<sup>5)</sup>の見解を支持するものであると考える。

次に、「どのような対応」が被受容感・被拒絶感に結びつくのかを検討する。被受容感と被拒絶感をもたらす裏表関係にあるカテゴリーがみられた。例えば約束を守ってもらうと被受容感につながるが、約束を守ってもらえないと被拒絶感につながる。Aを得ると被受容感につながり、Aを得られないと被拒絶感につながるというパターンである。この他、論理的には次の2つのパターンが考えられる。①Aを得ると被受容感につながるが、Aを得られないからといって被拒絶感につながるわけではない。②Aを得ると被拒絶感につながるが、Aを得ないからといって被受容感につながるわけではない。

以上のように、大学生が被受容感・被拒絶感を感じる他者には学年ごとの違いがみられた。このような学年による違いを把握することが、大学生の学年に応じた適応への支援に有効に働くと推測される。今後、被受容感・被拒絶感の再定義をふまえ、「どのような他者」と「どのような対応」の組み合わせが被受容感・被拒絶感にむすびついていくのかの検討が望まれる。

## 引用文献

- 1) 杉山崇 2002 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究第19巻第6号 589-597
- 2) 平岩祥子 1996 「安心感」と自我機能の関わりについて 学習院大学修士論文（未公開論文）
- 3) 杉山崇 2001 被受容感、被拒絶感の測定ツールの開発とその抑うつ過程 日本心理学会第65回大会論文集 944
- 4) 吉良安之 2001 入学期の特徴、鶴田和美編「学生のための心理相談」培風館 12-23
- 5) 南博文・山口修司 1991 大学生生活への移行、山本多喜司・S、ワップナー編「人生移行の心理学」北大路書房 179-204